

Title	<翻訳> 『私はバラモン』
Author(s)	ジョーシー, ジャナルダン シュリークルシュナ; 高橋, 明
Citation	印度民俗研究. 2024, 22, p. 27-40
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/97761">https://hdl.handle.net/11094/97761</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『私はバラモン』

シュリークルシュナ・ジャーナルダン・ジョーシー 作

高橋 明 訳・註



私について。私はバラモンに生まれた。私の親類もバラモンであることは言うまでもない<sup>1</sup>。しかし、友人、知り合いの多くもまたバラモンであることは言うておかなければならない。プネーの町で私は生涯を過ごした。実際はそこではバラモンは少数派である。私の学校でも住んでいた街でも非バラモンが多かったし、今も多い。だから本当なら彼らと私はもっと親しくなってもよかったわけだ。私たちの付き合いは台所の中まで及んでもよかったのだが、そうはならなかった。私たちの間には目には見えない距離があった。私はカースト制度を信奉する人間ではない。すべての宗教やカーストの人間は考え方からいっても、行動からいっても平等であるというのが私の信念である。私が学んだ学校でもそう教えられた。非バラモンたちと距離を置くように言われたことも、教えられたこともなかった。反対に学校では、カースト制度の無意味さを知り、心に刻みつけるよう教育を受けた。それでも私の心の中に自分がバラモンであることについてある種の誇りがあることは認めなければならない。私のクラスにマラーター・カースト<sup>2</sup>の少年たちがいたが、彼らも自分のカーストについての誇りを

---

<sup>1</sup> 著者はあるエッセイの中で、自身がチットパーワン・バラモン (चित्पावन ब्राह्मण) であると述べている。チットパーワン・バラモンとは、マハーラーシュトラ州西部のコーカン地方を本来の住地とするバラモンのサブ・カーストであり、弱体化したマラーター王国に代わってバージー・ラーオ1世 (在職 1720~40) が打ち立てたペーシュワー政権の下、社会の様々な面で権勢を謳歌した。また、1815年のマラーター王国の崩壊とイギリス支配の開始後は、導入された近代西欧的教育をいち早く受け入れ、官僚、教育者、学者、法律家、ジャーナリストとして名をなす人々がこのカーストから輩出した。(『南アジアを知る辞典』、1992、平凡社、p. 447、p. 658の「チットパーヴァン」及び「ペーシュワー」の項目を参照。項目執筆者は内藤雅雄) 後述のティラク、サーワルカルなども、同カーストの出身である。

<sup>2</sup> 『南アジアを知る辞典』では、マラーターの項目内で、R.E.エンソーヴェンの調査結果に基づいて、マラーター・カーストとは、マラーター王国の創始者シヴァージー自身の属したサブ・カーストで、王侯、将軍、地主を中心とした<真正マラーター>、耕作農民かつ一般兵士の<クンビー>、

持っていたことは言うておかなければならないだろう。こうした不自然な環境で私たちは成長し、また大人になった。

「私はバラモンである」この短い一文の背後にはいろいろな意味が込められている。少年の頃「私はバラモンである」と言うとき、私の態度はいささか毅然としたものであったし、その他のカーストの人たちもいづらか尊敬を込めた態度で私の方を見たものであった。その頃は、たとえ年齢が上であっても非バラモンの人物については、家の中や家族同士の話の中では単数形<sup>3</sup>でぞんざいに話題にする習慣があった。私が四歳のとき、ある女中が新しいサリーを着て家に来たことがあった。私は驚いて母親に声をかけた、「お母さん、ほらあのマラーター女が新しいサリーを着てるよ。」母親はそれを聞いても別になにも言わなかったが、その女は言った、「坊ちゃん、そんなことを言うものではないです。あたしらが新品のサリーを着てどこが悪いんですか。」私はそのやりとりで強い印象を受けた。後にプネーの市長になった人物は幼い頃、荷物担ぎの仕事をしていた。彼は私たちの家にも出入りしていた。豊かになった後も私の祖母に会いに来てはよく言ったものだ、「奥さんが作ったスープやパンは本当においしかったですよ。バラモンさんの家の食事は格別でしたね。」

---

さらに園芸師、壺作師など 12 の職人カースト<いわゆるバーラーバルト>の 3 分類を挙げている。また、1875 年以降のマハーラーシュトラにおける反バラモン運動の展開には、これらのサブ・カーストのいずれもが参加したこと、1930 年代ころから農村に基盤をおくマラーター＝クンビー・カーストが国民会議の主導権を掌握したとも述べている。(同辞典、p. 701、項目執筆者は、内藤雅雄)

भारतीय संस्कृतिकोश (1970, सं. महादेवशास्त्री जोशी, संस्कृतिकोश मंडळ) では、真正マラーターをクシャトリア、クンビーをシュードラと位置づけている。(vol.6, p. 752)

<sup>3</sup> マラーティー語では、敬意を表すために話題の主を指すのに複数形の代名詞を用いることが通例であり、動詞その他の語の活用もそれに準ずる。言い換えれば、単数形を用いることにより、軽侮の気持ちを表すこともできるわけである。

私たちが市場に買い物に行くと、野菜売りの女たちはお互いにこう言うのだった、「バラモンさんだよ、ちゃんとした野菜を売ってあげなくちゃ。」どこでもこうして大切にしてくれたものだった。その理由は私たちが金を持っているとか金持ちであるからという訳では決して無かった。その頃、私の父の月給は40ルピーだった<sup>4</sup>。同じ街の住人で私の家より何倍も多く金を稼いでいる人間たちはたくさんいた。ただバラモンだというだけでこれだけの尊敬を勝ち得ていたのだから驚く。その尊敬の念はしかし長くは続かなかった。

1928年か29年に真理探究運動<sup>5</sup>が盛んになった。すべてのバラモン階級に対する誹謗中傷があからさまになってきた。その頃のこと覚えていることをいくつか書いてみよう。学校で非バラモンの生徒たちが私たちのことを「くそ坊主<sup>6</sup>」と言って公然と罵るようになった。彼らは「坊主はただ飯食らって太りやがる」と囃したてた。ホーリーの祭りでもバラモンの女性に向かって卑猥な声を掛けるようになった。こうしたことすべてについて、学校の先生や町の主立った人たちも不快感を表すのを恐れた、つまり多数派のマラーターに対する恐れがその頃のバラモンたちには染み込んでいたのだ。あるとき、ガーヤクワダー<sup>7</sup>の前でシヴァージー<sup>8</sup>信奉者たちとバラモンとの間で暴力沙汰があった。その知らせが広がると私たちの住んでいた家の扉も窓もたちまち閉め切られたことを思い出す。中庭に住人の女たちが集まって、これからどうなるのかと不安そうに話をしてい

---

<sup>4</sup> 当時としても薄給であった。

<sup>5</sup> 真理探究運動 सत्यशोधक चळवळ とは、マハーラーシュトラの思想家、社会改革家、ジョーティーラーオ・フレー (जोतीराव गोविंदराव फुले, 1827?~1890) が宗教、カースト、男女の別などによる差別の解消、ヒンドゥー教の迷信、偶像崇拜などの廃止のために、1873年に सत्यशोधक समाज (真理探究協会) を設立して始めた運動を指す。ちなみにフレー自身は、花作り、野菜作りを生業とするマーリーと呼ばれるカーストに属していた。

<sup>6</sup> 原語は भट्ट्या

<sup>7</sup> バロダー藩王家がプネー市内に建築した別邸。

<sup>8</sup> マラーター王国の創始者 (1627~80)

た。私の父は県庁で働いていた。1934 年か 35 年頃、父が友人の一人に話していたことを思い出す。「公務員で働いていてももういいことはない。昔は役所で働いていたのはみんなバラモンだった。和気藹々と仕事ができたものだ。それが今ではシンデーやホールカル<sup>9</sup>連中が大手を振って働いている。連中は役所の仕事がどんなものかわかっちゃいない。」それを聞いて父の友人は言ったものだ、「シンデーやホールカルならまだ我慢ができるが、明日になればマハールやマニング<sup>10</sup>どもがやってきて、君と膝をつき合わせて仕事をするようになるぞ。」その他にも思い出すことがある。

真理探究運動以降、バラモンの地位の低下が始まった。あらゆる分野で撤退が目につくようになった。独立後、普通選挙の時代が来た。バラモンに対する敵意と侮蔑が高まって、政治の世界からだんだんと彼らは追放されるようになった。マハートマー・ガンディーの暗殺以来、低カースト社会のバラモンに対する怒りは激しかった<sup>11</sup>。頂上から最底辺へ転落した。農村でも郡庁のある町でもバラモン一家が誇りを持って生きることが難しくなった。プネーのような都会でも状況は同じだった。昼日中にバラモンの家に放火することが男らしい、また愛国者の証しだと思われるようになった。

その頃から、自分がバラモンであるということに引け目を感じだしたことを覚えている。自分のカーストがなんであるか訊かれたり、答えたりする羽目にならないようにとそう感じていた。それについて一つだけ思い出したことがある。ガンディー暗殺の翌日プネーでは放火事件が相次いでいた。私はその現場を見て歩いた。街角の至るところに人だかりがしていた。

---

<sup>9</sup> シンデー、ホールカルともに上記のマラーター・カースト、中でも「真正マラーター」に属する。

<sup>10</sup> マハール、マニングともに、かつて不可触民とされたカースト。

<sup>11</sup> 1948 年のマハートマー・ガンディー暗殺事件の後、犯人のナートウーラム・ヴィナーヤク・ゴードセー (नाथूराम विनायक गोडसे, 1910~49) がプネー出身のバラモンであったことから、マハーラーシュトラ州を中心にバラモンに対して無差別に発生した放火、略奪、殺人などの一連の暴動を指す。

その一つを通り過ぎたとき大声で呼びかけられた。

「ジョーシー、おい、ジョーシー。」私は内心狼狽して声の方を振り向くことなく急いで先に進んだ。後ろから呼ぶ声は続いていた。とうとう声を掛けていた男が走って私に追いついた。男は言った、「おい、ジョーシー、何度も呼んだのに聞こえなかったのか。」

私は答えた、「聞こえたよ。だけど返事をすると、ぼくがジョーシーでバラモンだということが君のせいで周りの連中にわかるのが恐かったんだ。だから逃げたのさ。」この頃からバラモンと分かる名前をおおっぴらに口にすることができなくなった。

ガンディー暗殺以来バラモンに対する憎しみにお墨付きが与えられた。誰もが立ち上がりバラモンに悪態を吐いて先頭に立って練り歩くべしという状況が生まれた。これについては二つほど覚えていることがある。私のある友人に 25 歳の息子がいる。私と話をしているときに彼が言ったのは、「ぼくは政治をやってみたい。ぼくは演説が上手になりたい。集会で喝采を得て、大臣になって社会のために尽くすのがぼくの夢です。」彼の浮世離れした目標を聞いて私は呆れてしまった。私の知り合いの一人がその場にいた。彼はその青年に言った、「そりゃあまったくばかげた話だ。バラモンは政治になんか関わるべきじゃない。君がどんなに頭が良くて犠牲的精神があろうと市議員にだってなれるもんじゃない。君のカーストのせいで、金もなく学歴もない人間であっても、ただカーストが低いというだけで簡単に君に選挙で勝つだろうさ。最後にはその男が大臣になって、君はいつまでたっても運動員どまりだ。」

私のその知り合いはあからさまにカーストの視点から話していた。しかし彼に反論するつもりにはなれなかった。なぜかと言えば彼の言い分は不幸なことながら 100%正しかったからだ。私の十六、七歳になる親戚の娘が 12 年生の試験で 85 点を取ったことがあった。私は彼女の家に行って祝福して言った、「お医者さんになるのかな。」するとその娘が気落ちした様子で言った、「さあ、どうなんでしょう。成績はととてもよかったんだけど。



でも私はバラモンでしょう。ダリト<sup>12</sup>じゃないの。あの人たちがカレッジに入学してまだ定員に余裕があれば私も入学させてもらえるかもしれないけど。」私の妻の兄の息子はアメリカで博士号を取った。彼はアメリカで何百ドルも給料をもらっている。彼が休暇を取ってプネーに戻って来るときに私は訊ねた、「それで、インドに帰ってくるのはいつなの。」彼は吐き捨てるように言った、「こんなところに戻ってきてどうするんですか。私はバラモンですよ。仕事なんかあるもんですか。他のカーストの連中が真っ先に採用されて、ぼくはその後です。それならアメリカの方がよほどましです。」—ある小説家がある賞のために作品を送らないのはなぜかと聞かれて、こう言ったものだ、「バラモンの作家が賞をもらうのは無理だ。ぼくが新仏教徒<sup>13</sup>かイスラム教徒であれば、ぼくの小説はきっと何か賞をもらえただろうけどね。」昨今のバラモンがどれほど意気消沈しているか、こうした例でわかるだろう。

真理探究運動は商人やバラモンたちに剣を突きつけた。しかし商売人たちにとってはどうということではなかった。大マハーラーシュトラ州運動<sup>14</sup>があっても農村部のグジャラート商人やマールワリー<sup>15</sup>たちには何の影響もなかった。彼ら商人たちはマハーラーシュトラ州の発展のために特段の貢献はしなかった。彼らに対する反感はまるでなかった。しかし、バラモンはそうは行かなかった。その矛盾については誰も気がつかなかった。マハーラーシュトラでバラモンが地主であったことはないし、農民の血を搾り取ったこともない。せいぜい二エーカー足らずの土地を小作や賃貸に出して田舎の老婦人や小学校教師として暮らしていたのだ。その人たちに

---

<sup>12</sup> 被抑圧民。不可触民をはじめとして歴史的に不当なカースト差別を受けてきた人々を指す語。

<sup>13</sup> アンベードカル博士の指導下に集団改宗をして仏教徒となったマハールたちを指す言葉。

<sup>14</sup> ムンバイを州都として、マラーティー語圏のすべてを包含する単独の言語州を実現しようとした政治運動。

<sup>15</sup> ラージャスターン地方のマールワール地域出身の商人集団。

地主のレッテルを貼って糾弾した。パトナやアラーハーバード辺りで僧侶が無知な農民を騙したようなことは、マハーラーシュトラでは少なかった。お布施で暮らしている人たちは確かにいたが、それは別に人をだましていたわけではない。それなのにフレー<sup>16</sup>以降、バラモンに齒を剥き出すという時代が続いている。

一方で、マハーラーシュトラの啓蒙運動のほとんどすべてをバラモンが献身的に果たしてきたのだ。過去百年の間に、国を愛するが故に死刑や無期懲役刑を受けたマハーラーシュトラ人の名を挙げるなら、その95%はバラモンであった。文学や社会的活動においてもバラモンが達成した成果は誰もが認めるだろう、とそう言っても他カーストから非難されることはあるまい。バラモンには教育の長い伝統があるために、こうした知的活動を彼らが担うことができたのである。また、彼らの自己犠牲、高潔、真摯かつ知的誠実さなどの優れた理想を他カーストの人間に示したことに疑いの余地はない。図書館、学校そして新聞事業にバラモンほど損得を顧みず貢献してきたカーストは他にない。

にも関わらず彼らは憎悪と批判の的となってきた。それについても何かしらの理由があるのだろう。ペーシュワー時代からマハーラーシュトラの政治と統治の責任をバラモンが担ってきた。他カーストの怒りもそれが一つの原因なのだろう。

それはそうだとすると、今日若いバラモンの心が別の道を辿っていることも事実である。150年に亘ってマハーラーシュトラの政治と社会を導いてきたのは彼らである。1935年から36年頃までバラモンの青年たちが政治の重責を果たしてきたことは私の記憶に新しいところである。

その頃はどの家でも政治が話題になっていた。会議派は正しいか否か、社会主義とは何か、などといったことが家々で話されていた。しかしだからといってバラモンの若者すべてが政治に参加していたわけではない。彼らは役所や学校で働いていた。だが、政治についても熱心に語っていた。新聞の社説やニュースに関心を注いでいた。彼らの心はそうした情報に育

---

<sup>16</sup> 注5を参照。

てられていたと言って良い。

独立後、特にガンディー暗殺事件以降、バラモン青年たちは政治から逃げ出した。自己犠牲や理想主義に対する彼らの自信はぐらつき始めた。150年に亘る政治運動への参加の道が閉ざされたことから彼らは精神的に目標を失ってしまった。しかし、今や彼らは自分の人生をまったく違った方向で築こうとしている。自分のことについて違うやり方で考え始めている。

今日のバラモン青年は、愛国心、自己犠牲、奉仕の精神、社会の啓蒙などは馬鹿げたことだと考えている。そんなことを信じる者はもう一人もいない。何かの理想のために我が身を捧げたり、貧困に甘んじることに意味があると考える者もいない。貧乏はこりごりだ、そして社会のために犠牲になるなどまったく無意味である、と彼らは経験で学んだのだ。国のために一生乞食をして暮らした人間がもし選挙に立候補すれば、バラモンだというだけの理由で供託金さえ没収の憂き目に会うのを彼らはその目で見ている。これについては思い出したことがある。ヴィナーヤクラオ・ブスクテー<sup>17</sup>同志がある選挙で会議派から立候補する希望を伝えたことがあった。しかし会議派は彼ではなく、ケーシャヴァラーオ・ジェーデー<sup>18</sup>を候補者とした。シャンカルラーオ・モーレー<sup>19</sup>氏はそのときこう公言したものだ、「ブスクテー氏はバラモンなので当選する可能性は低い。おまけに彼は金がない。だからわれわれはジェーデー氏を候補者としたのだ。」それに対して、ブスクテー氏はサカル紙上で書簡を公開した。「社会貢献ということでは私はジェーデー氏に遅れを取る者ではない。私はカースト制度を信じていない。しかし、私がバラモンカーストの生まれだというので私は差別を受けている。」この事件はいろいろなことを物語っている。

現代のバラモン青年はこうした事例から十分教訓を学んでいる。彼は政治や社会奉仕を口にすることがない。彼は理系や工学部門に自分の未来を

---

<sup>17</sup> विनायकराव भुस्कुटे 生没年未確認。ジャーナリスト、社会活動家。1920年代始めに Mulshi (मुल्शी) ダム建設反対運動を指導した。

<sup>18</sup> केशवराव जेधे (1896-1959). プネー出身の政治家。会議派党員。

<sup>19</sup> शंकरराव मोरे (1899-?). マハーラーシュトラの政治家。会議派党員。

見ている。

今日マハーラーシュトラのほとんどあらゆる産業、工場でバラモンが先頭に立っている。朝、仕事にでかける、そして夕方家に帰る。良い給料をもらっている。テレビ、冷蔵庫、電話などで自分の生活を豊かなものにしていく。美しく魅力的な妻、高額な給料、二人の子供、あらゆる家具が揃ったマンション、英語の推理小説、時に猥褻な読み物、これが彼らの人生である。ある高齢のバラモンが私に言った、「わしらの生活はパールシー教徒かアングロ・インディアンの中と変わらないものになった。他のマラーター人の暮らしとは縁が切れてしまった。わしらの暮らしはマハーラーシュトラの土地にはない。わしらはここではよそ者だ。」

一昨日、私はその老人の言葉を私のエンジニアである息子に話してみた。息子がどう反応するかをじっと観察していた。彼は何とも思わないようだった。息子は言った、「マハーラーシュトラの土地とか根っこって一体何のことですか。なんでそんなことを気にするんですか。ぼくにはそんな暇はありませんよ。クラブの交際で忙しいですしね。もし明日、外国でいい仕事が見つかるなら、こんな国を思い出すこともなくなるでしょうよ。」

集団改宗について私の友人の息子がこう言った、「バラモン全員がイスラム教徒になりましょうよ。その方がずっといい。選挙でも勝つでしょうし、職も見つかるでしょう。マラーター指導者たちも票のためにぼくらの前に跪くでしょうしね。」

彼の言葉を聞いて私ははなはだ不愉快に感じた。このマハーラーシュトラと縁が切れてしまうことがどれほど恐ろしいことか。パーラージー・ヴィシュヴァナート<sup>20</sup>からロクマーンニヤ・ティラク<sup>21</sup>、サーワルカル<sup>22</sup>

---

<sup>20</sup> बालाजी विश्वनाथ (1662-1720). マラーター王国最初の世襲宰相（パーシュワー）。

<sup>21</sup> लोकमान्य बाळंगाधर टिळक (1856-1920). マハーラーシュトラ出身のインド独立運動の指導者。

<sup>22</sup> दामोदर विनायक सावरकर (1883-1966). マハーラーシュトラ出身のインド独立運動の指導者。

から M.M.ジョーシー<sup>23</sup>に至るすべての歴史を思い浮かべた。言いようのない落胆を感じた。よそ者になると考えるだけでおぞましいことだった。

これもさることながら、もう一つさらに忌まわしいことが起こっている。150年に亘って政治を司り、巧みに舵を取ってきたこのカーストが、貧困に耐えつつ、学問を重んじ、社会の幸福のために尽くしてきたこのカーストが、今やまったく沈黙している。政治に絶望し片隅に退いている。

150年の伝統が今途切れてしまっている。そのため今日のマハーラーシュートラには何か奇妙な空白が生じている。社会が虚ろなものになっているのではないか。その虚無のせいで汚職が蔓延し、倫理的な価値の低下が明らかになっているのではないか。

そうだと断定することはできない。たぶんそうだろうと言えるだけだ。もしかしたらそうではないかもしれない。しかし、何かが失われてしまったことは事実である。そう思うと私はいたたまれなくなる。

その虚無の例が今のバラモンの無力感となって現れている。自分たちバラモンに悪態を吐いていけば生きていくことができると、そうもの考えるバラモン自身を感じている。『ガーシーラーム署長』の劇<sup>24</sup>をバラモン知識人の全員が推薦した。そのとき、ある友人の作家は自分から進んでいそいそとその推薦状に署名をした。彼は私に言ったものだ、「推薦をしなかつ

---

<sup>23</sup> मुर्ली मनोहर जोशी (1934-). マハーラーシュートラ出身の政治家。インド人民党の指導者。

<sup>24</sup> 18世紀、ペーシュワー時代にプネーに実在した警察署長の暴虐を題材にしたマラーティー語戯曲。作者はヴィジャイ・テンドゥルカル विजय तेंडुलकर (1928-2008)。プネーの進歩主義演劇協会 (The Progressive Dramatic Association) によって1972年12月に初演されたが、歴史的事実についての歪曲があり反バラモンの要素があることを理由に、協会の会長によって続演が禁止された。(“Introduction” by Dr. Nandana Datta, *Ghasiram Kotwal*, by Vijay Tendulkar, 2004, Oxford University Press, New Delhi, p. 3)

<sup>24</sup> 礼拝や食事の際などにバラモンが身につけるべきとされた絹製のドータルやサリー。

たら、私は進歩的知識人ではないということになってしまう。」あるダリト作家の小説が出版されたとき、一人のマラーター・カーストの作家が言った、「バラモンの批評家は誰もが口を揃えてその小説を賞賛するだろう。小説が良かろうが悪かろうが関係ない。—バラモンの批評家のように哀れな連中はいないよ。」

私はバラモンである。私はタベの礼拝をしない。浄衣を着ることもない。浄不浄も関係ない。肉も食べる。しかし、私はバラモンである、それがどうしたというのか。ただ、そうだというだけのことである。他人の目からみてもそうだし、私から見てもそうなのだ。

私の子供や孫たちは理数系が得意だ。彼らは金もたっぷり稼いでいる。私が貧しかったようなことは彼らにはない。

しかし、それでも私たちはマハーラーシュトラに足をつけて生きてはいない。私たちはアングロ・インディアンさながらに暮らしている。

なんということだろう。そう考えただけで私は死んでしまいたいような気になる。この地に根付かず生きるくらいなら、死んだほうがましだとそう思うのである。

【解題】

原題 “मी ! एक ब्राह्मण”, जोशीपुराण (初版 1982, 第二刷 2009), श्रीविद्या प्रकाशन, पुणे (原作の初出年は未確認。) 作者 श्रीकृष्ण जनार्दन जोशी (1915-1989)。

ここで翻訳した作品は、पुणेरी (『プネーの人々』、初版 1972 年) に続いて、作者がプネー市にまつわる回想を中心に、家族や自身の来し方を振り返ったマラーティー語のエッセイ集『ジョーシー・プラーナ』に収録された随想である。短い作品であるが、現在のマハーラーシュトラでバラモンが置かれている境遇について、作者の経験と観察に基づく率直な告発と訴えが述べられている。文中にも出てくるダリト (被抑圧民) という言葉は、すでにマハーラーシュトラ州を超えてインドのみならず、世界的な文脈で語られることが多くなっている。同時に、インド国内だけでもカースト差別に代表される様々な不当な差別や抑圧に対する、政治的、社会的、文化的な啓蒙活動、改良活動が進められてきている。その一方で、いわゆる逆差別と言われる行き過ぎた差別反対運動に対する批判や抗議の声も聞かれるようになっている。そのことがまた、しばしば激しい暴力的な軋轢を生み出す原因となっていることも周知のことである。わが国でも、インドのカースト差別について知るための文献や資料は現在、比較的手に入りやすい環境にあるが、一方でそれを別の視点から見るための資料はそれほど多くはないと思われる。問題が何であれ、できる限り多くの視点から検証することの必要性は言うまでもない。本エッセイの翻訳が、その一助となれば幸いである。